
Love is All

こーしょー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Love is All

【Nコード】

N9471A

【作者名】

こーしょー

【あらすじ】

命じられるがままにヒトを殺し続けてきた白髪の少女。彼女の前に一人の青年が現れた時、二人の拙いラブストーリーが幕を開ける――本作にはほんの少しだけ暴力的なシーンが混ざっていますので、そういったものがどうしても苦手な方は……んー……気を付けて読んで下さい（笑）

×プロローグ×（前書き）

今回のこーしょーはいつもと違いますぜ？

えー……どうやら自分は、筆が進まなくなると、突発的に短編モノが書きたくなるタチのようです（汗）

この作品も6〜7回で終わらせる予定（今回は「かつて交わした約束と」の場合とは違って、増えないと言い切れないので確約できません……）ですので、暫しの間どうかお付き合いの程をm（
し）m

×プロローグ×

——ふと、少女は夜空を見上げた。

薄汚れた雑居ビルの群れの合間、歪つな形に切り取られた夜空の中心に浮かぶ、綺麗な満月。

星の瞬きすらない虚空の闇の中、真円の月から放たれる白光は弱々しくも、浴びる者を突き刺すような鋭さ、凍えそうな冷たさを内包している。

それはとても遠く、高い場所に在るはずなのに。

手を伸ばせば触れられそうで。

でも触れてしまえばココロまで凍り付いてしまいそうで。

何故だか無性に怖くなって。

少女は月を見上げるのを止め、自らの目の前で這い蹲っている現実へ、視線を戻した。



——街外れにある、薄暗い路地の奥。

時刻は日付が変わってから数時間が過ぎており、加えて駅前のメ
インストリートから結構な距離があるこの場所の近くを、人が歩い
ている気配は無い。

「ひぁ……あ……うぁ……」

酸素を求める魚のように口をぱくぱくとさせながら、薄汚れたア
スファルトにへたり込む男が一人。

その息遣いは荒く、左手で右肩を抑えている。

その上着に滲む色は――赤。

滴り落ちそうなほどに血液を吸った布地は、月の光でぬめるよう
な光沢を放ち、男の出血量が尋常でない事を窺わせる。

そして、男の目の前には、一人の少女が立っていた。

華奢な体躯に小柄な体。

黒い七分袖のワイシャツに、同じく黒のロングスカート。

胸元に結ばれた、赤いリボン。

ベリーショート髪の毛は真っ白で、それを隠すためなのか、や

はり黒いバンダナを巻いている。

場所と時間次第では、どこぞの喫茶店で働いている人間に見えなくも無いが、少なくとも深夜の路地裏で見られる格好ではない。

西洋の人形のように整った顔立ちを隠す、長めの前髪。

口元は、微笑みの形に歪んでいる。

——ことん。

「——ひっ！」

ことん。

ことん。

ことん。

少女はゆっくりと、裸足で硝子の上を歩くような速度で、編上げブーツ独特の靴音を鳴らしながら、男の方へ一歩一歩近付いていく。

「く……来るな……っ……来るなあっ……！」

その悲鳴じみた叫びに、少女の歩みを止める力はない。

男は右腕を庇いながら、これ以上は近づけさせまいと、ずりずりと後退していく。

——と、男の背中が、何かにぶつかった。

「っ!？」

がらんがらん、と大きな音を響かせながら倒れたゴミ箱に、男が気を取られた、その瞬間——。

少女が左腕を横に薙いだ。

続けて風切り音。

暗闇を切り裂く、軌跡が尾を引くような幾筋もの光。

「っああああああああっ！」

一瞬遅れて、男の絶叫。

男の両の太腿には、小振りのナイフがそれぞれ二本ずつ、深々と突き刺さっていた。

「……数秒先も見えない生にしがみつくのはもう充分でしょう？
そろそろ大人しくして下さいな」

優しく、聞く者に慈愛すら感じさせるソプラノボイス。

口元に浮かぶ微笑を崩さずに、少女が言う。

しかし、夜風にふわりと揺れた前髪の間から覗いた瞳には、何の感情も浮かんでいない。

少女の左手には、いつの間にか四本のナイフが指の間に挟まっている。

「さて、これから私は、ゆっくりと時間をかけて貴方を殺すわけですが、始める前に遺言や懺悔の言葉は御座いますか？　まだ理性があるうちに仰っておいた方がいいですよ？」

私も鬼じゃありませんからね、と笑う少女の顔も声も、その服装も、違和感しか感じさせない。

「い……嫌だ……わ、私は……私はまだ死にたくない……」

「……ふむ？」

何かを思案するように目を閉じる少女。

「な、何でもするっ！　金がほしいならいくらでも払ってやる！　だから命だけはっ！」

屈強な成人男性が小柄な少女の足に縋りつき、命乞いをするその様子は、正に「異常」の一言に尽きる。

「……………」

「はっ……はっ……はあっ……」

暫しの沈黙。

男の、獣じみた荒い息遣いのみが、薄暗い路地裏を支配する。

やがて、少女が目を開く。

「……はい、分かりました」

「ほ、本と――」

「今のが遺言なんですよね？」

ちやんと覚ええましたから安心して下さい」

男の目が絶望に見開かれる。

[illegible]

先程よりも一際大きな絶叫。

再び左腕が振るわれ、四肢のうち唯一無傷だった左腕と、血に塗れた右腕にナイフが突き立つ。

「これで四肢全ての筋を断ちましたからもうまともに動けません。それではもう思い残す事はございませんね？　少しずつ殺してさしあげますから、せめて三十分くらいは頑張って下さいませ」

少女は右手を背中へまわし、ワイシャツの中から、刃渡り二十センチメートル程の短刀を引き抜いた。

ことん、ことんと靴音を響かせながら、男へ歩み寄っていく。

「う……うああ……」

逃げようなどという考えは、男の頭の中から既に失せていた。

彼を支配しているのは、これから自身に行われる蹂躪に対する恐怖心のみ。

「さてと。それでは————そろそろ始めましょう？」

少女は短刀を逆手に握り直し、そして殺人が始まった——。

×プロローグ×（後書き）

自分はいつも、気に入った曲に触発されて小説を執筆しております。

「かつて交わした」は奥華子様のガーネット。

「僕の不器用な彼女」はHY様のSong For…。

「前へ踏み出す一歩」は……まだ言えません。オチ分かつちやいます（汗）

そして今回は二曲です。MELL様のRed Fractionと、タイナカサチ様のThis illusion。

聞いた事が無い方は一度訊いてみて下さい。一聴の価値はありますから。

最後になりますが、感想、批評お待ちしております。

×1×(前書き)

今回は残酷な描写は全くございませんので安心して読んじゃって下さい(笑)

× 1 ×

月の光を浴び

仄暗い闇の中で白い髪は淡い輝きを放つ

顔に浮かぶ微笑みはとても温かく

瞳の奥は限りなく冷たい

その心に意志はなく

その行いに目的はなく

ただ命じられるがままにその両手を紅く染める

その歩みを止めることは誰にも出来ず

少女が去った後に残るのは人間と呼ばれていたモノの肉隗のみ

右手にガランドウの心を抱き

左手に銀色に光る刃を携え

ツクリモノの微笑みを顔に貼り付け

白髪の少女は死を引き連れて歩く



——ぴんぽーん。

数週間ぶりに聞く、呼び鈴の音。

散在していた無意識が集約し、人格というカタチを成す。

「ん……………」

細く目を開ければ、そこにあるのは見慣れた自室の天井。

いつもと同じ朝。

何も変わっていないセカイ。

「……………」

仰向けの身体を、ごろんと九十度回転させる。

カーテンが開きっ放しになっている窓の外にはどんよりと重い雲が広がっており、今太陽がどのくらいの高さにあるのか全く分からない。

——ぴん、ぽーん。

二度目の呼び鈴。

眠気を振り払うように、少し勢いをつけて上半身を起こした。

安物のパイプベッドがぎしりと軋む。

それでもまだ身体は睡眠を欲しているのか、両目は完全に開いておらず、ベッドから下りるには至らない。

うなだれたまま、白髪の間隙からうなじをぽりぽりと掻きながら、右手で枕元を探る。

しかし、指先に目当ての物——転がっているはずの目覚まし時計の感触は伝わってこない。

——ぴん……ぽーん。

三度目の呼び鈴で時計の搜索を一旦諦め、少女はようやくベッドから重い腰を上げた。

温もりの残る布団を断腸の思いではぐり、ベッドから足を下ろす。

と、足の裏に、床とは違う何かの感触が伝わってきた。

意識が一瞬で覚醒し、慌てて足をどける少女。

そこには目覚まし時計が、文字盤を上に向けて転がっていた。

「……………はあ」

小さく、安堵のため息を吐く少女。

昨晚、寝返りをうった拍子にでも落としてしまったらしい。

落下の衝撃も何のその、秒針は休むことなく時を刻み続けており、
現在時刻は十三時二一分。

昨夜、「仕事」の事後処理云々を終えてこの部屋へ戻り、ベッド
に倒れ込んでそのまま眠りについたのが午前八時少し前だった。

職業の内容が特殊なだけに、その生活リズムは常人とは異なり、
ほぼ完全に昼夜が逆転してしまっている。

——ぴん……………ぽーん。

四度目の呼び鈴。

住人が在宅中であるという絶対の自信があるのだろうか。

勧誘の類にしては、随分と諦めが悪い。

「——はい、今開けます」

居留守を使うのは断念し、玄関に向かって叫ぶ。

目覚まし時計を元の位置に戻し、フローリングの床をひたひたと
音を立てながら、少女は来客を迎えるために玄関へ向かった。

チェーンロックはそのままに、二重の鍵を外して鉄製の扉を少しだけ開ける。

「どちら様でしょ——」

そこに立っていたのは、見たこともない青年だった。

男性にしては少し長めの黒髪。

とても柔和そうなその顔は、緊張しているのか、ぎゅっと引き締まっている。

よく分からないイラストがプリントされた半袖の白いシャツに、色あせたダメージジーンズ。

首にはタオルが巻かれ、その両手には小さな箱。

今まで少女の部屋を訪ねてくるような人間は、彼女の上司か、宗教、保険、新聞などの勧誘、セールスマン以外にいなかった。

だからそれ以外の人間への対応の仕方を、少女は教わっていない。

「……………」

予想外且つ正体不明の訪問者に、何の対応も出来ず、ぽかんと口を開けて呆ける少女。

「あつ、あのっ、俺、今日隣に引っ越してきた……桐嶋という……も……」

緊張した面持ちの青年の言葉は段々とボリュームが落ちていき、同時にその視線が少女の顔からゆっくりと下がっていく。

「——っ!？」

と、いきなり顔を明後日の方向へ背ける青年。

「え、と……その………どうか、したのでしょうか？」

少ない会話のボキャブラリーを総動員し、顔を真っ赤にしてそっぽを向く青年に尋ねる少女。

「そ、そのっ……ふ、服っ、服をっ!」

「?」

服と言われて下を向く。

少女が身に着けていたのは、ブラジャーとショーツ、つまり、下

着のみだった。

×2×
(前書き)

今日この話書いていて気付きました……絶対五回じゃ終わらない
……
(汗)

× 2 ×

「……はい、入金は確認しました。これで依頼の方は完了……は？
は、はあ……分かりました。本人にそう伝えておきます……それ
では」

かたり、という音と共に、受話器が戻される。

とある五階建ての雑居ビルの三階。

その一室、「ゆずさわ としつぐ柚澤敏次法律相談事務所」と表記された表札が掛け
られたドアをくぐると、そこには小ぢんまりとしたオフィスがある。

両側の壁に設置された大きな本棚の中にびっしりと並ぶ、辞書、
辞典などの書籍群。

収まりきらない資料やファイルはリノリウムの床に積み重ねられ、
腰の高さ程の塔をいくつも形成している。

申し訳程度、といった感じに窓際に置かれた二鉢の観葉植物。

ごちゃごちゃとしたオフィスの奥、入り口に向かい合うような形
で鎮座している事務机。

その上に革靴を履いたままの両足を投げ出し、オフィスチェア
をぎしぎし軋ませている男——柚澤は、ワイシャツの胸ポケットか
ら煙草の箱を取り出した。

最後の一本を口に咥え、箱をくしゃりと握り締めながら、机に置かれた百円ライターで火を点ける。

「ふう……」

口から吐き出された紫煙は、空気の淀んだ室内をゆらゆらと漂いながら、ゆっくりと消えていった。

柚澤敏次。

表向きはこの法律相談事務所を経営する弁護士であるが、本当の仕事は殺し屋の斡旋、つまり殺し屋と依頼人のパイプラインである。

依頼人はまず、柚澤に仕事を依頼する。

柚澤は依頼人の身元を調べ上げ、それが危険な仕事ではないと判断した場合、彼と契約している殺し屋に仕事を依頼するのだ。

報酬は依頼料の十分の三。

高いリターンの代わりに、殺し屋と一蓮托生、つまり万が一殺し屋が捕まった場合は彼も道連れになる、という高いリスクを同時に背負っている。

こんこん、という控えめなノックの音に、物思いに耽っていた頭

が現実へ引き戻された。

机上の足を慌てて下ろし、啞えた煙草をぐりぐりと灰皿で揉み消す。

「は、はいどうぞつ。鍵なら開いてますから」

かちやり、と扉が開く。

「失礼致します」

透き通るような声と共に入ってきたのは、喪に服しているかのような黒衣を身に纏った少女。

彼女も柚澤と契約する殺し屋の一人なのだが、他の殺し屋とは少々事情が異なっていた。

「何だ弥生か……」

舌打ちと共に、安堵の中にほんの少し怒りが混じったため息を吐き、接客用の態度を崩して力を抜く柚澤。

「どうした？ お前がここを訊ねて来るなんて珍しいじゃないか」

少女――弥生が最後に柚澤の事務所に来たのは二ヶ月前である。

オフィスに染み付いた煙草の臭いが苦手らしく、余程急ぎか、大事な用事がある時以外、弥生は柚澤の事務所を訪れることはない。

柚澤もそのことを理解しているので、彼から弥生に用事がある時は大抵、彼女の部屋か、何処か別の場所で落ち合うようにしていた。

弥生はオフィスに入ってすぐのところで、両手を下腹部の前で重ねた姿勢のまま、ぼんやりと立ち尽くしている。

「……一つ、教えて頂きたいことがありました」

その顔に表情らしい表情は浮かんでいない。

「教えて欲しいこと？ ……ま、明日にでもこっちから出向くつもりだったから手間が省けて助かるがな。ああ、さっき昨日の仕事の依頼人からさっき電話が来たんだ。お前に、お礼言っといってくれたとさ」

「お礼、ですか……？」

その意図が全く掴めない、といった風の弥生。

柚澤はデスクの引き出しから買い置き煙草を一箱取り出しながら、「ああ」とも「おお」ともつかない返事を返し、

「昨日お前が殺した男、依頼人の元旦那さんでな。二年前に結婚したんだが、暴力振るうは働かないは借金こさえるはで結婚生活一年待たずに離婚したそうだ。だがその旦那ってのが離婚後もストーカーよろしく依頼人に付きまとってたんだと。警察に言っても効果無しで、最終手段ってことで借金までして俺に依頼してきたってわけ

だ。ま、ちょい前まで好き合ってた人間殺した奴に礼言うなんて、よっぽど辛かったんだろ」

どうしようもない世の中だ全く、とぼやきながら箱の封を切り、新しい煙草を口に咥えた。

「……何故あの旦那様は奥様に暴力を振るったのでしょうか？」

弥生の問いに、煙草に火を点けようとライターを口元に近付ける柚澤の手が止まる。

「ふむ………可愛さあまって憎さが百倍なんて言葉があつてな。奥さんに対する愛情が強かっただけに、何かのきっかけで一度憎くになると、注いでいた愛情の反動で必要以上に暴力を振るってしまうと。大方そんな感じじゃないか？」

「そのきっかけ、とは具体的にはどのようなものなのですか？」

「まあ、一番ありきたりなのはお互いの生活習慣やら価値観やらの違いか。食事の味付けやら洗濯物の畳み方やら……んなもん挙げていったらキリなんてないってのにな」

最後の呟きは誰に向けたものだったのか、ライターで煙草に火を点けて、ため息混じりに紫煙を吐き出す。

柚澤にも何か思うところがあるのだろう。

「ですが、恋愛というのはそうだったことも目を瞑り、相手の欠点すら愛することで成り立つものではなかったのですか？」

「今日は随分絡んでくるなお前……ってそんな話どっから聞いた？」

こうして柚澤と普通に会話出来ているようで、実は弥生には一般常識のようなものが欠けている。

そのことを自覚している弥生は、分からないことがあれば柚澤に質問をし、柚澤も極力その疑問に答え、暇を見つけては色々教えていた。

だが男女の恋愛観などというものについては、今まで語ったことも、質問されたこともない。

それなのに弥生の口から、一般的な恋愛論が飛び出したのだから、柚澤が驚くのも無理の無い話だった。

「貴方からですトシツグ。二ヶ月程前に私の部屋で仕事の話をしていた時、その途中でかかってきた電話の相手に対して、貴方はそのように応じていましたか？」

「あー……聞かれてたか」

「聞いていたわけではありません。話している声が大きかったので、玄関の扉越しでも聞こえてきました。……何か問題がありましたでしょうか？」

「……………まあ聞かれて困るような話でもない。俺の不注意だからお前は気にしなくてもいい」

平静を装ったその声には何処か、隠し切れない悲しみや疲れの色が滲んでいたが、人の感情の機微に無頓着な弥生が、その微妙な変

化に気付く筈もない。

「……ま、丁度良いか。少し長くなりそうからそこ座れ」

柚澤が煙草の灰を落としながら顎をしゃくった先には、応接用のソファとテーブルがあった。

「了解しました」

言われた通りに、弥生は大人しく座った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9471a/>

Love is All

2010年12月7日03時20分発行